

わたしの中国語遍歴

荒川 清 秀

わたしの基礎をつくった愚公会時代

「先生はどうして中国語を始めたのですか」と尋ねられることがよくある。別に高邁な動機があったわけでもなく、単に人があまりやらないことをやろうと思ったにすぎない。当時、中国語学習者はマイナーだった。また、当時は中国に関わる仕事ができればいいぐらいしか頭になく、研究者になるなどとは正直考えたこともなかった。高邁な動機より、長く続けられる動機を常に生み続けることの方が大切だ。

わたしが大学に入ったのは1968年。まだ中国とは国交もない時代で、中国は文革の嵐が吹き荒れていた。中国語を学ぶ中で、社会主義中国にあこがれ、それを人々に知らせたいと思ったことはたしかだ。それは、わたしが大学2年のときに大阪にできた中国語講習会「愚公会」の活動を通してだった。この講習会は、わたしの恩師である香坂順一先生と民間での中国語学習者の人たちがいっしょに立ちあげたもので、わたしはここで補講助手を2年、講師を5年務めた。講習会は、大学と違って単位で学習者を引き留めることができない。面白くなければ去ってしまう。わたしたちは、いかにして学習者をつなぎ止めるかを常に考えた。しかも、当時の受講生は政治に関心をもつ人が多かったから、つねに「先生はなぜ中国語を教えるのですか」と問われた。「中国語が好きでやっています」などとはとてもいえない時代だったのである（今ならいえるが）。わたしの中国語教育に対する姿勢は、ほぼこの愚公会時代に形成されたといっている。

発音の基礎はしっかりと

わたしが中国語を学び始めたころは、まだ周りに大陸からやってきた中国人はほとんどいなかった。わたしは最低発音の基礎だけはしっかりとつけたいと思い、使ったのが白水社のソノシートである。これは、わたしの家の隣に住んでいた、神戸大学・立命館大学名誉教授の

中川正之さんが貸してくれたもので、わたしはこれをくりかえしくりかえし聞いた。大学では、台湾籍の京劇をしていた先生が、週1回の会話の授業で発音をなおしてくれた。会話の勉強は、その愚公会の会話班に出席させてもらって勉強した。当時、大学の先生は会話ができないものだとバカにされた時代で、なにくそと思ってがんばった。

まわりに生きのいい中国人がいない環境で、中国語を勉強しようと思えば、小説や新聞に頼るしかない。わたしは小説や新聞をたくさん読んで、その中で語彙を増やし、中国語の言い回しを覚えていった。のちに、中国から戦争孤児の人たちが帰国し、その子弟と交際しだしていわれたことは、「あなたの中国語は高級知識分子の中国語ですね」だった。口語にふれる機会がなかったのだから仕方がない。留学できなかった最後の世代であるわたしは、かれらと濃いつきあいをするなかで、大衆のことばを覚え、口語を鍛え、中国の大衆の気持ちにふれていった。わたしは其中で、どうやって中国人から中国語を学べばいいかを習得した。

留学するまでにやるべきこと

わたしは27歳の時に愛知大学に就職し、1982年から83年にかけて日本語教師として北京語言学院（現北京語言大学）へ派遣された。もちろん、大衆のことばが最初から聞き取れたわけではないが、それまで鍛えてきた中国語は十分役に立った。それは、基礎を十分に固めたことと、自分なりの勉強法を身につけていたからである。今は、自由に留学ができる時代だ。しかし、留学すればなんとかなると思てはいけない。留学までに日本でできることをたくさんやり、中国や中国語を観察する視点を養い、自分なりの学習法を身につけなくてはならない。

さて、わたしが教育、研究の面でやってきたことは大きく以下の三つである。

(1) 中国語教育

大学に入ったころ、わたしは最初東洋史を志していた。しかし、それにいきづまりを感じ中国語に専攻を変えたときも、将来中国に関わる仕事ができればいいぐらいにしか考えていなかった。そんなわたしに一生この道に進むことを誘ってくださったのは故香坂順一先生である。先にも述べたように、先生は当時大阪で、中国語講習会「愚公会」を開いたばかりで、わたしにその仕事を手伝うよう誘った。

なお、教授法については『雑誌中国語』『教学月報』1980・4～、『体験的中国語の学び方』（同学社2003）に書いた。後者は還暦記念に出してもらったもので、わたしの外国語学習法や中国、ヨーロッパとの関わりも書いた。

テキストは入門、中級（会話・講読）を十数冊出したが、入門で決定版というものはまだ出せていない。テキストは、文法事項を無理なく配していること、テキストの本文や例文が自然で面白いことが必須である。比較的気に入っているのは、入門では最初に出した『用例用法初級中国語』（1985）である。これは中国から帰ってきて、試作本を作ったあとに出版社から出してもらった。当時はまだテキストをつくる人が少なかったので、比較的よく売れた。ただ、後半は難しすぎるという批判もちょうだいした。あと、2008年にNHKラジオでやった『まいにち中国語』があるが、これは分量が多すぎて大学では使えない。中級では『中国語ステップバイステップ』がある。これはドリル形式で難易度を二段階に分けた。今見ると用例等不満もあるが、今も授業で使っている。あと、『美香 in China』。これはNHKの応用編講座を聴講してくれていた同学社の編集者がテキスト用に編集してくれたもので、本文が短くこなれていたの、けっこう長く使った。

（2）漢字・漢語

漢字・漢語に興味をもったのは、愛大に赴任した当時起こった「日中漢字の共通化を」という新聞投書に反論しようと、「日中両国語における漢字」（愛大『文学論叢』60輯 1978）を書いたのが初めてで、この続きを書かないうちに、文化庁から出ていた『中国語と対応する漢語』を読んで憤慨し、のちに「中国語と漢語」（同62輯 1979）にまとめた。批判する過程でわかったことは、本書で対象とした中国語は台湾国語で、本当はすれちがっていたのである。この論文の草稿は日本語教育学会で発表し、国立国語研究所でも話す機会を得た。これがわたしが日本語、日本語研究者と関わりをもつ大きな契機になった。1982年に北京語言学院で日本語を教えながら研修をしていたとき、日本学センターに来ていた武部良明氏の講演で、漢字の書き分けの不合理性についてかみつき、それはのち「現代日本語における漢字の意味」（『日本語と中国語の対照研究』11 1986）「字音形態素の意味と造語力」（『文学論叢』82・83輯 1986）にまとめた。漢字の意味の存在条件は現代日本語における音と訓としての使用にあることを各方面から論じたものである。後者で「熱、暑」の意味を扱ったことから「熱帯」日本語起源説に疑問をもち、漢語がいかにしてつくられ、いかにして日中共通になったかという問題意識からいくつかの地理学用語に焦点をあて、10年かかって『近代日中学術用語の形成と伝播』（白帝社 1997）をまとめ、これで学位をいただいた。日中同形語の研究が歴史研究に立ち入らざるをえないことを感じた。そして、現在わたしの関心は日中の漢語語基や造語法の比較にあり、最近の成果は『日中漢語の生成と交流・受容』（白帝社 2018）にまとめた。

(3) 文法・語彙

文法研究の最初は、「中国語における『命令』の間接化—“叫(让)”に対する一つの視角」(『中国語研究』16号 1977)で、当時は中国語の使役文が間接話法にかかわっていることを問題にしたが、これは中国語の使役文の特性にかかわることであった。そのあと、大阪外大にいた寺村秀夫氏のお誘いを受け、日中対照研究会に加えてもらい、最初に発表したのが「日本語名詞のトコロ性」(1982)で、このころから日本人の視点からの中国語研究を意識するようになった。それは形態変化のない中国語の変化を日本人の視点からいかにとらえるかというもので、その成果の一つは「“知道”“了解”“愛”——引起状态动词的转换的词语搭配和结构」(『現代中国語研究』11)である。これは「知っている、愛している」等の状態動詞がどのような条件下で出来事を表し、動作を表すかという研究である。中級参考書として書いた『一步すすんだ中国語文法』(大修館書店 2003)にも文法研究の多くの成果をとり入れたが、現在は『さらにすすんだ中国語文法』を執筆中である。これとは別に、専門論文は『動詞を中心にした中国語文法論集』(白帝社 2015)にまとめた。

語彙研究は、東方書店『東方中国語辞典』(2003)が一つの成果だが、その出版以後『東方』誌に2005年から連載中の「やっぱり辞書が好き」で、中国の街で見る漢字の特徴、中国語の動詞、名詞の特徴、さまざまな辞書のすがた等を紹介する中で、自分なりの中国語語彙論というものを意識するようになった(現在172回)。この成果は『中国語を歩く—辞書と街角の考現学』(東方書店 2009)に結び、その後、PART II (2014) PART II (2018)にまとめた。この連載では、いわばわたしの中国語に対する「気づき」を書かせてもらっているが、この中国語の世界の発見に対する喜びがわたしの原動力になっていることを最近つくづく感じる。それは文法研究でもそうで、理論研究への指向はあるものの、結局のところは、事実の発掘に対する喜びでやってきたようなものである。故寺村秀夫氏はかつてわたしのことを「あんたのやっているのはフィロロジーやね」と評したことがあったが、これまでを振り返ってまさにその通りだと実感する。それはかつて東洋史を志したわたしの形を変えた姿なのかも知れない。

そして、退職を前にして出したのが『漢語の謎』(ちくま新書)である。これはわたしの『中国語を歩くパート3』(2018)を読んだ、筑摩書房のK氏が「漢字を通して日本語と中国語の差違が見えるような本を」という依頼に応じて書いたもので、わたしとしては卒業論文ならぬ退職論文と位置づけている。